

テニスの劇的独白詩「ユリシーズ」

——難破を越えるヴィジョンの劇化——

野 口 忠 男

テニスの劇的独白詩「ユリシーズ」 ——難破を越えるヴィジョンの劇化——

野口 忠 男

目 次

はじめに

I テニスの詩人観

II 「ユリシーズ」の作品分析

- 1 知識の追求
- 2 テレマコスへの別れの言葉
- 3 巡礼としての旅
- 4 難破を越えるヴィジョン

おわりに

はじめに

テニスの初期の代表的な劇的独白詩「ユリシーズ」“Ulysses”は、1833年10月20日に執筆され『1842年詩集』*Poems* (1842)に収められている。これはケンブリッジ以来の親友アーサー・ハラム (Arthur Hallam, 1811-33)の死に深く悲しみながらも、強く生きなければならない思いを歌った作品であると言われる⁽¹⁾。この詩に対する多くの批評家の意見は、劇的独白の語り手ユリシーズをテニスの分身と見なし、主観性の強い作品として捕えている。ところがR. ラングバウムは、テニスの人生に対する特徴に関して「ある種の退屈さとすべてを忘れて休みたい気持」“a certain life-weariness, a longing for rest through oblivion”⁽²⁾と卓越した考えを述べている。さらにW.D. ショーは、「ユリシーズは退行感情と英雄願望が均衡を保っている」“Ulysses holds both the regressive impulse and heroic yearning in balance”⁽³⁾と捕え、

A. W. トムソンは、「欲求不満、生と死にはさまれたためらい」“frustration, a lingering between life and death”⁽⁴⁾と述べている。彼らの観点は、詩人の伝記的な事がらを作品の解釈に持ち込むのではなく、劇的独白の語り手を詩人テニスとは異なる客観的な人物であるとする立場である。私はこのユリシーズを生と死のアンビヴァレンス (ambivalence) と解釈する論点を踏まえながら、心象、表象、言語の考察を通して、アンビヴァレンスを越える可能性を論じてみたい。作品の分析を進めるに当たり、テニスの詩人観をロマン派の文学思潮の中で捕え、同時代のR. ブラウニングの思想と劇的独白の手法と比較し、さらに『イン・メモリアム』*In Memoriam*を意識して考察を進めて行きたい。

I テニスの詩人観

テニスは幼少の頃よりG.G. バイロンの詩に心引かれ、1827年兄チャールズと共に『二人の兄弟詩集』*Poems of Two Brothers*を出版した。ここにはバイロン、スコット、グレイなどの文学的影響が見られ、豊かな詩想と巧みな言語使用の萌芽が認められる。ケンブリッジの学生時代にロマン派の詩人W. ワーズワース、P.B. シェリー、特にJ. キーツに関心を抱き、1830年6月『詩集、主として抒情作品』*Poems, Chiefly Lyrical*を出版し好評であった。この詩集の中に詩人の本性と役割

キーワード：劇的独白、心象、シンボル、心理的分析、意識の流れ

に関する詩「詩人」“The Poet”と「詩人の心」“The Poet’s Mind”が収められている。

テニスは「詩人」の中で詩人について次の様に歌っている。詩人は黄金の星が輝く黄金の国に生まれ、嫌悪や愛が生まれつき資質として備わっている。生と死、善と悪、自己の魂を見抜く者であり、「驚異的な不巧の意志」“The marvel of the everlasting will”

(1.7)の持ち主である。この詩人の「思想」“thoughts”(1.11)は「炎の翼を持つ」“wing’d with flame”(1.12)「目に見えない矢」“The viewless arrows”(1.11)であり、それは「銀の舌から吹き鳴らされるインディアンの葦笛」“Indian reeds blown from his silver tongue”(1.13)に喩えられる。この葦笛は風に乗り、大地へと運ばれ、「実り豊かな英知」“the fruitful wit”(1.20)をもたらす「野の花の矢のような種子」“the arrow seeds of the field flower”(1.19)となり、空中を飛び、大地に根を下ろし、新たに芽を吹き出し、「黄金の花」“A flower all gold”(1.24)を咲かすのである。この花は「真理という翼のある矢」“The winged shafts of truth”(1.26)を遠くへ飛ばし、「希望と若さのささやく泉」“the breathing spring of Hope and Youth”(11.27-8)の湧き出す春を美しい花で飾る。ここまでは詩人の思想の種子が発芽し真理の花を開く、詩が生まれる過程を述べている。

多くの者はこの黄金の花を自ら目を閉じて見ようとしな。高い望みを抱き夢見る魂の者には、天が流出し、真理が真理を生み、「世界は大きな庭となる」“the world/Like one great garden”(11.34-5)。そしてこの真理の大きな庭に昇る太陽から「自由」“Freedom”(1.37)が現れて来る。さらにこの純粋な自由から「知恵」“Wisdom”(1.46)が見出される。この知恵は「権力を夢想する悪」“All evil dreams of power”(1.47)を揺り動かすもので「神聖な名前」“a sacred name”(1.47)が冠せられている。知恵の言葉は雷

鳴の様に「人間の魂を引き裂き、大地の人々を驚愕させる」“riving the spirit of man,/ Making earth wonder”(11.51-2)のである。これは詩が人々に真理と自由と知恵を示し、人間の魂を開眼させる効用について述べている。

次に「詩人の心」を概観してみたい。詩人の心は常に澄み切り、明るく輝いている。それは「澄み切った水晶の川のように流れる」“Flowing like a crystal river”(1.6)のである。詩人の心は「聖なる場所」“All the place is holy ground”(1.9)であるために、「暗い顔の詭弁家」“Dark-brow’d sophist”(1.8)は近寄っていけない。詩人は「聖なる水」“Holy water”(1.12)をすべての花に注ぐ。暗い顔の詭弁家には、庭の真ん中でさえずっている陽気な小鳥の歌声が聞こえない。この庭の中央には一面に光輝く「泉」“fountain”(1.24)が湧き出している。泉ははるか遠くにそびえる「紫の山の頂」“the brain of the purple mountain”(1.29)から流れ出て来る。さらにこの山には「天国」“Heaven”(1.32)から泉の水が流れ出ている。この泉は永遠の愛を奏でているのにもかかわらず、暗い顔の詭弁家には耳が聞こえないため、清澄な泉のささやく音は聞こえない。「罪に汚れくさい臭いがする」“you are foul win sin”(1.36)ため、彼らが入って来るとこの泉は大地の中へ消えてしまうのである。ここには清い心の詩人と罪で汚れた詭弁家のことが歌われている。詩人は彼らから逃れ、純粋な詩の世界へ安住の場を求めているのである。

黄金の国に住み知恵に富む詩人は、想像力を駆使し作品を創造し、真理と自由と知恵を民衆に提示するのである。彼らの蒙昧な心を奮い起こして、理想の社会を建設する高い思いを強く抱いている。これはJ.ミルトンが『失樂園』Paradise Lostの冒頭で「永遠の摂理を説き、神の思いの正しさを人々に明かす」“I may assert Eternal Providence,/And

justify the wayes of God to men”と歌い、W. ブレイクが『経験の歌』の序詩で詩人の予言者の働きを説き、S. T. コウルリッジが「クブラ・カーン」“Kubla Khan”で歌った神聖な詩想である。さらに W. ワーズワスが『靈魂不滅のオード』“Intimations of Immortality”で示し、J. キーツが「ギリシア壺に寄せるオード」“Ode on a Grecian Urn”で描き、P. B. シェリーが「西風のオード」“Ode to the West Wind”や詩論『詩の弁護』*Defence of Poetry*で説いた「非公認のこの世界の立法者」“the unacknowledged legislator of the world”へと連綿と流れている真理と知恵を伝える詩人の精神である。テニスもこの高邁な精神を深く吸収し、時代を担う詩人の使命として理解し、邁進して行く気概に満ちていたのである。

しかしながら「詩人の心」に於いてテニスは、詩人の精神を理解しない「暗い顔の詭弁家」がたくさん出現していることを表明している。確かにイギリスは産業革命により、社会の機構が大きく変化し、精神的な文化への価値を重んじる生き方よりも、俗物的で功利的な生き方に傾斜する動きが強く認められた。詩人と民衆との間のこの亀裂と分離はますます顕在化し、詩人はいかにそれを埋めるかの問題に直面させられることになる。これはまた R. ブラウニングが遭遇した問題でもあったのである。彼は『パラケルスス』*Paracelsus* や『ソーデロ』*Sordello* のような長く難解な詩を避け、詩人が直接自分の声で語る主観性の強い詩ではなく、距離を置いて自分の声とは異なる別の声で、客観的に語る劇的な方法を模索したのである。テニスも R. ブラウニングと同様に、自分に相応しい主題と表現形態を求め試行を重ねることになる。ロマン派の詩人たちのような抒情詩ではなく、客観的に劇的に語る方法、つまり劇的独白による表現を試みることになる。彼は1830年代にたくさんの劇的独白の詩に挑戦し、

「柱頭の行者聖シメオン」“St Simeon Stylites”や「ティソウナス」“Tithonus”のような珠玉を書き、「ユリシーズ」“Ulysses”もその一つであったのである。

Ⅱ 「ユリシーズ」の作品分析

私たちは「ユリシーズ」を考察するに当たり、語り手の独白の方法と詩の内容から考えて、詩は大きく三つに区切ることができる。1行～32行目までは、ユリシーズの現在の思いと過去の栄光を独白 (soliloquy) する場面、33行～43行目は息子テレマコスを臣下たちへ紹介する劇的独白であり、44行～70行は仲間の水夫たちへの語りかけを通して彼の旅の目的が示される劇的独白である。テニスが語り手として選んだのは、ホーマーの『オデュッセイア』*Odyssey* (xi 100-137) の英雄ユリシーズである。また詩人ダンテの『神曲』*Divina Commedia* (xxvi 90-124) の話を素材にしながらもヴィクトリア時代のユリシーズ像の創造を目指し新たな解釈を加えている。この劇的な語り「ユリシーズ」は、最後の一行に向かって表層から深層へ、過去から未来へ、現世から未知の新世界へと淀みなく流れ収束する形で形成されている。

1 知識の追求

この詩は年老いた王ユリシーズの独白から始まる。

It little profits that an idle king,
By this still hearth, among these barren
craggs,
Matched with an agèd wife, I mete and
dole
Unequal laws unto a savage race,
That hoard, and sleep, and feed, and
know not me. (ll. 1-5)

ほとんど何の得にもならない、怠惰な王の私が、
この静かな炉辺で、このような不毛のごつごつと岩がそそり立つ地で、
老いた妻と連添い、ふさわしくない法律を与え施すことは、貯え、眠り、食うだけで、私を理解しない野蛮な人民にたいして。

語り手ユリシーズは現在の心境を空しく満ち足りないものとして捕えている。その気持の矛先を年老いた妻ベネロペと野蛮な人民へ向ける。妻ベネロペは、ユリシーズの留守の間の20年間、彼の帰宅を待ち望み、男たちの誘惑にも負けずに貞節を守り通した女性である。妻と人民に対して意外とも言える不満の言葉を弄することは、彼の心中に何か言い難い思いが秘められているからであると考えられる。またこの意外な語り出しは、読む者の関心を引き、彼らを語りの世界へ自然と導き入れる大きな役割を果たしているのである。劇的な独白の作品が成功するか成功しないかの鍵は、最初の数行の語りの出来具合で決まると言える程である。例えばR.ブラウニングの成功している劇的独白詩「ポルフィリアの愛人」“Porphyria’s Lover”や「今は亡きわが公爵夫人」“My Last Duchess”を考えて見ても、それぞれの導入部は見事な語り出しで形成されている。

語り手はこの場の状況や雰囲気表現するために形容辞を厳選して使用している。「静かな炉辺」“this still hearth”で、ひっそりとした活気のない館や家庭が暗示され、「不毛のごつごつと岩がそそり立つ地」“these barren crags”では、イサカ (Ithaca) の不毛な土地を表現しているだけでなく、ユリシーズの老いた性の不毛さと共に彼の満たされない心の状態を語っていると思える。語り手は形容辞だけでなく動詞の使用にも細心の注意を払っている。怠惰な王がふさわしくない法律を「与え施す」“mete and dole”には、身分

の低い奴隷に施しをする主人のような横柄な態度が表現されている。「貯え、眠り、食うだけで、私を理解しない野蛮な人民」“a savage race, / That hoard, and sleep, and feed, and know not me”の動詞を重ね積み込むような表現には、いらだちや不満だけでなく嫌悪感さえ示されている。この様にテニスンには、風景描写や人物描写を用いながら、人間の内面の微妙な感情を描くのである。この表現手法は彼の本質的な特性であると言える。韻律は弱強五歩格 (iambic pentameter) が用いられ、単語は単音節の古英語が顕著に認められる。語り手ユリシーズの複雑な感情の起伏や陰影を表現するのに、単語や韻律が巧みに使用されていることがわかる。

続いて語り手は、抑え切れない旅への思いを語る。彼は旅を通して人生を深く知り尽したい願望に駆られている。しかしこれがいかなる旅なのかは明かされないのである。彼は過去の旅を物語ることから始める。これはホーマーの『オデュッセイア』の多様な旅の世界を彷彿させるものであり、ユリシーズの偉大さや自意識の強さを誇示するものである。彼の人生の旅は、楽しいものであり、苦しいものでもあった。一人で旅をしたこともあるし、愛してくれた仲間との旅もあった。陸を歩く旅もあり、悪天候の海を歩く旅もあった。語り手は暗い海を次の様に表現している。

Through scudding drifts the rainy Hyades
Vext the dim sea: (ll.10-11)

風に飛びちぎる雲から雨をよぶ星々が
暗い海を悩ませた。

この「暗い海」“the dim sea”は、「渦巻き」“the gulfs”(1.62)へと変容される重要なイメージである⁶⁾。私たちは海の心象について考えてみたい。「暗い海」は文字通り黄昏どきの海であるだけでなく、死タナトスをもた

らす世界であり、さらに浄化や人間精神の解放を表わす世界でもある。「陸」"shore"(1.9)が意識の世界を示し、海が無意識の世界を表わしているとも考えることもできる。ユリシーズの広大な無意識の世界で演じられる死と再生の問題は後で触れることにしたい。

ユリシーズの決して満足できない旅が詳しく語られる。

For always roaming with a hungry heart
Much have I seen and known; cities of
men
And manners, climates, councils, gov-
ernments, (ll.12-4)

いつも満ち足りない心でさすらい、
多くを見多くを知っている、人の住む都、
風習、気候、会議、政治

異国の都での豊富な経験に基づいた広い知識が強調されている。彼ははるか遠くの風吹き渡るトロイの剣の鳴り響く平野で、敵人と合戦の喜びを語るのである。この場面はホーマーの『イリアッド』*Iliad*の戦いを思い出させる。ユリシーズは戦場で勇ましく戦う勇者としての存在を顕示しているのである。彼は「未知の世界」"that untravelled world"(1.20)を求めて「経験」"experience"(1.19)を積み重ねて行く。彼が未知の世界を求めて進めば進む程、それはますます遠のいて行く。語り手はこの未知の世界の実相に関しては語っていない。形容辞"untravelled"が示唆していることは、今まで誰も訪れたことのない人跡未踏の世界であり、このことはホーマーもダンテも語っていない世界である。

I am a part of all that I have met;
Yet all experience is an arch where-
through
Glams that untravelled world, whose

margin fades

For ever and for ever when I move.
(ll.18-21)

私は私がかって出会ったすべてのものの一部である、
それでもあらゆる経験はそれを通して未知の世界が
かすかに光る弓形の門であり、
私が進めば永遠に消えて行く。

この「弓形の門」"an arch"のイメージは、「天界、聖所、秘密の場所」⁽⁶⁾を表わすことから考えて、地獄や煉獄の門ではなく聖なる天界のある場所を表象しているように思われる。

語り手は休息し無為に一生を終えることに耐えられない、常に新しい経験を求める人物である。「私に残された人生は短かい」"of one to me/Little remains"(11.25-6)と述べ、人生を無為に過ごすことのできない状況に立たされている。

but every hour is saved
From that eternal silence, something
more,
A bringer of new things;and vile it
were
For some three suns to store and hoard
myself,
And this gray spirit yearning in desire
To follow knowledge like a sinking star,
Beyond the utmost bound of human
thought. (ll.26-32)

わたしの一刻一刻は
あの永遠の沈黙から救われている。そこにはそれ以上の何かがある、新しいものをもたらししてくれるものがある、
だから三年の年月をわが身を惜しみ 閑居

して暮すと言うのは何ともいやしいことだ、
この灰色の老いた魂は 沈み行く星のように
人間の思想の極限を越えて
知識を求め望みあこがれる。

語り手は「あの永遠の沈黙」“that eternal silence”に触れ、それが死を暗示していることは確かである。しかしそこには死以上のもの「新しいものをもたらしてくれるものがある」“something more, /A bringer of new things”と語り、“bringer”がいかなるものであるかは示されていない。この表現は、57行の「新しい世界」“a new world”と関連する重要な心象である。ユリシーズは残された人生を閑居して暮らすことは耐えられない。彼の老いた灰色の魂は、死の国で暗示される世界へ、人間の思想の極限を越えて、「知識」“knowledge”を求めて行くと語るのである。「沈み行く星」は、T.S.エリオットの「消えて行く星」“fading star”⁽⁷⁾のように精神的な死を意味すると思われる。「老いた灰色の魂」が思想の限界を越えて「知識」を得ようと思えることは、魂の死に繋がるものであると言える。知識を追求することが最終的には死に至ることを、シェリーは『アラスター』*Alastair* で歌い、R.ブラウニングは『ポーリン』*Pauline* さらに『パラケルスス』*Paracelsus* で語っている。パラケルススは完全なる知識を追求し、人類に奉仕しようと願う科学者であり、愛を求めることを忘れていた。彼は臨終の際に愛を探求していた詩人アプライレの幻を見て、愛の重要性を知るのである。ユリシーズもパラケルススと同じ様な魂の軌跡を描いていることが認められる。

2 テレマコスへの別れの言葉

ユリシーズは旅立つ前に下臣たちに向かって、息子テレマコスへ王位を譲ることを述べる劇的独白である。

This is my son, mine own
Telemachus,

To whom I leave the sceptre and the
isle—

Well-loved of me, discerning to fulfil
This labour, by slow prudence to make
mild

A rugged people, and through soft de-
grees

Subdue them to the useful and the
good.

Most blameless is he, centred in the
sphere

Of common duties, decent not to fail
In offices of tenderness, and pay

Meet adoration to my household gods

When I am gone. He works his work, I
mine. (ll. 33-43)

ここにいるのが私の息子、テレマコスだ、
息子に私は王笏とこの島を譲ることにする—
最愛の子はこの仕事を果してくれると思わ
れる、

穏かに思慮を巡らし 粗野な民の心を和ら
げ、

彼らを優しく導き 有用で善良な民にする
に相応しい者である。

息子はまことに非の打ちどころがない、私
が旅立てば

日常の責務に専念し、母親に対する愛情は
口先だけにならない慎み深さがある

家の守り神を礼を尽くして奉ってくれる。

息子は息子の仕事を果たし、私は私の仕事
を果たす。

ユリシーズの劇的独白の順序は、息子に王
位と島を譲り渡すこと—息子が政治を立派に
司どること—日常の義務を果たすこと—母親
に対する慎み深い愛情—一家の神を正しく奉る
こと、公の務めから始め個人的なことへと理

路整然としている。彼は息子の政治的能力や性格をよく見抜き、客観的に理性的に言葉を語り、感情に流され取り乱すようなところが見られない。

この場面は、新しい経験への渴望を抑えきれない老王が、旅立ちを前にして王位を息子へ譲る王位継承の儀式である。王にしてみればすべての権力を息子に託し、自分は王位の権力の座から降りなければならない。それは老王の残る命の短さを語るものであり、世代の交代の儀式でもある。ユリシーズの心中は、解放感と安堵感と共に空虚感と寂寥感が、複雑に交錯していたと思われる。この様な王に残された最後の道は、リア王の様に恥を忍びながら醜態をさらして生きるのではなく、すべてを息子に託して、旅に出ることであった。彼の冷静な言葉には、揺れ動く感情を抑え、終始勇者ユリシーズの面目を保ち続けるのである。そして最後に息子は息子の務めを果たし、ユリシーズはユリシーズの務めを果たすと潔く語るところに、騎士道精神にも通じる未知の旅に賭ける決意の強さが見られる。この箇所は、ユリシーズの知識の追求の旅を越える新たな出発への転換点として読むことができる。

3 巡礼としての旅

ユリシーズは王位を息子に託し、いよいよ旅立つ時が迫って来た。彼は苦楽を共にし、信頼のおける船乗りたちへ向かって劇的独白の形式で語りかける。語り手のかけひきの巧みさ、レトリックの見事な使用が見られる詩行である。

最初に暮れ行く港の光景が描写される。船が帆をはらみ出帆の準備が整っている。「黒い大海原」“the dark broad seas”(1.45)がかすかに見える。すでに見て来た海“the dim sea”(1.11)よりも恐しい暗い海であり、死を暗示している。ユリシーズの船出が死出の旅に終るかもしれないことが示されている。

—you and I are old;
Old age hath yet his honour and his
toil;
Death closes all: but something ere the
end,
Some work of noble note, may yet be
done,
Not unbecoming men that strove with
Gods. (ll. 49-53)

君たちも私も年老いた、
だがなおも老人には老人の名誉と奮闘がある。
死はすべてを閉ざしてしまう。しかし終わりが来る前に何が、
何か気高く重要な仕事、まだなされるかもしれない。
神々と共に努めたまことふさわしい人々には。

ユリシーズは彼らの挫けそうな気持ちを鼓舞するために、老いても「名誉と奮闘」があることを訴える。死は全ての終わりかも知れないが、何か気高く重要な仕事になされるかも知れないと希望と信念を語るのである。この気高く重要な仕事とは一体何であろうか。ここではユリシーズは語らないのである。彼らが「神々と共に努めた」ことは意味深いことと言わなければならない。神々は大文字で“Gods”と表現されている。ユリシーズはゼウス神の裔であることはホーマーが述べているところである。このことは彼らが行くところはどこでも神々が共にいて守ってくれることが意図されている。

ダンテの『神曲』では、ユリシーズと船乗りが海に乗り出し、長い放浪ののち、越えてはならない境を越え、旋風にあい難破することが描かれてある。船乗り全員が溺死する。ユリシーズは知識追求の傲慢の罪のために地獄に落とされる。テニスのユリシーズは、

ダンテの描いた地獄の世界を越えること、つまり巡礼としての船旅を通して、難破を越えるヴィジョンを捕えることである。

4 難破を越えるヴィジョン

岩場から明りが揺れ出す。長い日は今暮れようとしている。月がゆっくり昇る。海の波音が聞えて来る。ユリシーズが求める世界が歌われる。

'Tis not too late to seek a newer world.
Push off, and sitting well in order smite
The sounding furrows; for my purpose
holds
To sail beyond the sunset, and the
baths
Of all the western stars, until I die.
It may be that the gulfs will wash us
down:
It may be we shall touch the Happy
Isles,
And see the great Achilles, whom we
knew. (ll. 57-64)

新しい世界を求めるのに遅すぎることはない。

船を押し出せ、座り準備をすべて整えて波立つ航路を櫂で打ちつける、私の目標は日の沈むかなたへ行くことだ、

西空のすべての星が輝くかなたへ、私は死ぬまで進んで行く。

深いうず巻が私たちを海底へ巻き込むかも知れない。

あるいは 私たちは幸福の島へ着き、
私たちが知っているあの偉大なアキレスに
会えるかも知れない。

ユリシーズ一行が向かって行くところは、「新しい世界」"a newer world"であり、この詩を読み解く鍵となる表象である。この世

界は、ユリシーズが求めて来た知識追求の死を暗示する"that untravelled world"(1.20) "that eternal silence"(1.27) とは異なるものである。ユリシーズは「新しい世界」の探求に命をかけ、死ぬまで追求して行くと語る。それはダンテが表現したように、深いうず巻が彼らを巻き込んで溺死させるかも知れない死への旅である。あるいは「幸福の島」"the Happy Isles"に着き、「偉大なアキレス」"the great Achilles"に会えるかも知れない永遠の命への旅かも知れない。つまりユリシーズの願いは、ダンテのうず巻による溺死の世界を越えて現われる幸福な歓喜の世界であることはまちがいないと思える。私たちは「幸福な島」と「偉大なアキレス」の表象について考えてみる必要がある。「幸福の島」は、テニスンが「詩人の心」の中で描写している「聖なる場所」を思い起こさせる。そこには清らかな泉が湧き出でて、きれいな花が咲き小鳥のさえずる楽園である。この泉の水は紫の山頂から流れ出ている。それは天に連らなり、天から流出しているのである。これは新プラトン主義のプロチノスの流出の思想である。それはまたアーサー王が致命傷を負った後に西方海上にある極楽島に通じる神聖な浄福の世界なのである。次に「偉大なアキレス」に会うことの意味はいかなるものであろうか。ホーマーの『イリアッド』に歌われている様に、アキレスは若々しい正義感に満ちた誉れ高い存在であり、ユリシーズたちの偉大な精神の主柱であった。ユリシーズは無意識の世界で「新しい世界」は「幸福な島」であり「偉大なアキレス」がいると想像していたと思われる。「幸福な島」と「偉大なアキレス」へのヴィジョンが、ユリシーズの死から魂の再生への劇的な転換をなす詩的経験の心髄なのである。

テニスは『イン・メモリアム』に於いて、ハラムの死に直面し、苦悩の淵に落ち込み、絶望し、人間の生と死、魂の不滅性、神の実

在、宇宙の本質を考え詩に歌ったのである。詩人テニスは、ダンテが『神曲』でビアトレチェの霊に導かれて天国に到ったように、彼はハラムの霊によって懐疑を克服し、最終的に信仰に達する、いわゆる深い絶望から魂の覚醒への劇的な転生を経験するのである。この転換の詩的経験は、ユウルリッジが「老水夫行」“The Rime of the Ancient Mariner”の中で、海蛇の神秘的な美しさに神の実在を直観し、ワーズワスが「靈魂不滅のオード」で子供の心の無垢性に魂の神性を直視したように、テニスの詩的直観の原理だったのである。

ユリシーズは仲間と共に夜の海に船出するのである。

Though much is taken, much abides;
and though
We are not now that strength which in
old days
Moved earth and heaven; that which we
are, we are;
One equal temper of heroic hearts,
Made weak by time and fate, but strong
in will
To strive, to seek, to find, and not to
yield. (ll. 65-70)

多くを失ったが、多くが残っている、
私たちは天地を動かしたあの昔の力はないけれども、
私たちは私たちがなのだ
英雄の心は一つの同じ気質なのだ、
時と運命のために弱くなってはいるが、意志は強い
努力し、求め、探し求めて、挫けずに。

ユリシーズは天地を動かすような昔の活力はないけれど、英雄の心は同じ一つの気質であると主張する。時の流れと運命の力には、

逆うことはできず、体力は衰えてきている。しかし彼らの意志は強いのである。テニスは「詩人」の中で「驚くべき不朽の意志」“The marvel of the everlasting will”を詩人は持っていることを述べている。この宗教的な不屈の意志に支えられて「新しい世界」へ旅立つ勇者の気概を力強く語るのである。テニスは観念の世界で生きるのではなく、行動を通して「新しい世界」へ向うことを力説している。F.E.L. プリーストレイは本来の人間の勤めに関して次の様に述べている。

The true human task, as Tennyson would see it, is to use their wisdom in an attempt to see further, to choose, and to act by choice. Wisdom is for action, not for passivity.⁽⁸⁾

本来の人間の勤めは、テニスが理解したいと思っていたように、先を見抜き、選択し、選択により行動するために知恵を使うことである。知恵は行動のためにあり、消極的なもののためではない。

深い絶望に耐え、幾多の困難を乗り越えて来た強い意志は、新しい挑戦にも決してひるむことなく立ち向かう勇気と行動力が兼ね備わっていると言える。

キーツは「ナイチンゲールに寄せるオード」“Ode to a Nightingale”で鳥の歌声に導かれて現世を忘却し、美の極みで死を願うけれども、再度現実の世界へ回帰する。R. ブラウニングは「エブリン・ホープ」“Evelyn Hope”で現世で愛を求め与えるだけでなく、来世に於いても愛を追求して行く。テニスはキーツの死の願望を越えて新しい世界へ向かって進んで行くが、R. ブラウニングのように来世において力強く愛を追求する姿勢は弱いと言える。テニスにあっては、新しい世界へ到るまでの激しい闘争に意味があるの

である。

[6] Ibid, p.21.

[7] Ibid, pp.440-1.

[8] F. E. L. Priestley, *Language and Structure in Tennyson's Poetry*, Andre Deutsch, pp.42-3.

おわりに

「ユリシーズ」を考察するに当たって、二篇の詩「詩人」と「詩人の心」を取り上げ、テニソンの詩人観を見て来た。作品の分析では、心象や表象それに言語に注意を払いながら、語り手ユリシーズの意識の深層を辿るよう努めて論及してきた。知識の追求からテレマコスへの別れの言葉、巡礼としての旅、難破を越えるヴィジョンを逐次考えて来た。ユリシーズの旅は、単なる知識の追求の旅ではなく、意識の深層に潜む死に到る旅を通して、自己の変革と形成を希求する、魂の軌跡の寓意的表現なのである。難破を越えるヴィジョンは、当時悩めるテニソンの生きることへの願望であり、俗物的なヴィクトリア朝社会の人々への精神性の訴えであり、さらに普遍的な宗教性のヴィジョンの提示であったと言える。その劇化は、R.ブラウニングのように客観的で劇的なものではなく、主観的で抒情性の強い劇的独白である。若い詩人テニソンが、ダンテを越えるヴィクトリア朝ユリシーズの死を超越するヴィジョンを、明示したことは意義深いことである。

[注]

- (1) Hallam Tennyson, *Tennyson, a Memoir*, 1897, I, p.196.
Charles Tennyson, Alfred Tennyson, London & New York, 1949, p.193.
- (2) R. Langbaum, *The Poetry of Experience*, The University of Chicago Press, 1985, p.89.
- (3) W. D. Shaw, *Tennyson's Style*, Cornell University Press, 1968, p.85.
- (4) A. W. Thomson, *The Poetry of Tennyson*, Routledge & Kegan Paul, 1986, p.65.
- (5) Ad de Vries, *Dictionary of Symbols and Imagery*, North-Holland Publishing Company, 1974, pp.405-7.

[Abstract]

Tennyson's "Ulysses" in the Dramatic Monologue: The Dramatization of Visions Through the Wreck

Tadao NOGUCHI

The great monologue, "Ulysses", was written during the period of activity that followed the death of Arthur Hallam in September, 1833. Many critics consider Ulysses, who is the eloquent speaker in the dramatic monologue, as a part of Tennyson's personality. However, R. Langhaum suggests a new idea to read the poem as "a certain weariness and longing for rest through oblivion". This paper attempts to discuss the stream of Ulysses's consciousness based on the imagery, symbol and the use of the language. His journey is not the pursuit of knowledge but the longing for his personal change and formation through the death and life imagery of the sea travel. It means that the poem can be read as the allegorical expression of his soul development. It is said that Tennyson makes a splendid success of dramatizing the visions through the wreck.

Key words : Dramatic Monologue, Imagery, Symbol, Psychological Analysis,
The Stream of Consciousness